

2007年  
2月11日(日)  
AM9:00~16:30

## 第2分科会

# カントリーコード(地域の物語)をアブリだそう

場 所  
音 楽 室

ゲスト

遠藤 ケイ 氏 (もの描き)

コーディネーター

飯田 裕子 氏 (写真家)

### 【遠藤ケイという生き方】

遠藤：新潟県三条市の下田(しただ)という行き止まりの村に住んでいる。豪雪地帯で、1週間家をあげると、家を掘り当てるのが大変。

以前は房総の「大崩」という所に住んでおり、丸太180本くらいで家を作った。房総は住みやすいところだが、何となく毎年、アバラが1本ずつなくなっていくような感覚があった。でも20数年すんでいた。

どこか違うところで生きたいという思いと、頭の中に雪で真っ白な山のイメージがあった。

全国を取材等で回っていたが、故郷の三条市を流れる五十嵐川の水源地を見に行ったことがきっかけで、下田村に行き着いた。すぐ下流の三条市からは、下田村は鬼が出る怖いところだから、行ってはいけない、といわれるような場所だった。でも、水のおいが自分に合った。そこで、村の中でも、守門岳と粟岳がいっぺんに見られる場所に家を建てた。

16歳の時から旅が始まった。絵描きになりたかったが、昔は東京に出ないと話が始められなかった。でも、東京は考えていたところではなかった。田舎では自分の力で生きていて、人のせいにならない。東京はすべて人のせいになる事や、労働がお金で換算される社会に違和感を持った。そこで、山へ行って半場で働き始めた。そうしたことで山の人の暮らしに注目しはじめた。日本を作ってきた人というのは、そういう人たちだから、それを記録しよう。

ただ、山の人と会って話すのは気持ちが良いが、自分が東京に帰ら

なければならぬところが後ろめたかった。で、29歳のときに、すべてを捨てて房総で自力で山暮らしをはじめた。

いろんなものを見てきたので、ぐちゃぐちゃになっているの思考を整理したいと思うが...夜、酒を飲みながら書いていると「すばらしいことを考えている」と思うが、朝になるとわからなくなっている。

宮沢賢治の言葉に「世界全体が幸福にならないうちに、個人の幸福はない」という言葉がある。賢治は農業に対する純粋な思いを持っていた。それは農民は近代の熱狂に囚われない、持続的なものを持った人たち。土は「生」の根本をなすものだから、土を耕す人は「生」を生み出す人だと。

が、岩手の農業は厳しかった。農業は土に手を触れることの喜びがあると考えると、農民に持ってもらいたかったが、農民はそうではなかった。とにかく食えることが大事であると。そこで思いを裏切られた。

僕は「個人が幸福にならないうちは、世界は幸福にならない」と思う。それは自然界の仕組みの中にヒントがある。自然では色んな生物が寄り集まって構成されている。それぞれの生き物が自発性に基づいて活動しているのに、全体としてバランスが保たれている。どんなに小さい生き物ももたらす変化でも、全体の変化に影響を及ぼす。逆もある。それと同じで、個人個人の充実が社会を動かす力になる。ただ、社会の秩序が落ち着いてきたときに、個人も影響を受ける。「どちらが大切か」ではなく、それが機能しているか?が大事。人間という種も自然界のひとつ。

### 【道具をつくること】

遠藤：出身の三条市は鍛冶の町。小さな鍛冶屋がたくさんあるところだった。鉄の塊が人間の手で刃物になっていくという様子を見ていた。実家は差し金屋で、小学校の時に工場にこっそり入って刃物を作った。子どもたちの中で、一回り大きい刃物を持って歩いてたら、親父に見

つかって怒られた。

刃物がなくて成り立つ職業はない。そういう意味では鍛冶屋は聖職者。だが、鍛冶屋は「鼻黒イタチ」「鍛冶屋ボロ」とか呼ばれ、差別されている。

「鍛冶屋になりたい」というのは、小学校のときからくすぶっていたこと。千葉に移った時に、自分で道具を作り始めた。このころから、全国の鍛冶屋に押しかけて取材し、同じものを作るということをして10年間していた。手仕事の鍛冶屋は「トンテンカン」という音がする。素材の状況によって異なる音がする。今の鍛冶屋は機械打ちなので、鉄の金属組織を無視している。鉄は生き物である。今の鍛冶屋は素材がわからず、物をつくっている。

鉄を鍛造するときは松炭を使う。松炭は柔らかい。風を送ると火が強くなり、やめると火が弱くなる。四角く切って、全体が同じ温度になるようにすることが必要だから。

山に入るときは鉋1本だけ持って行く。それだけでなんでもできる。道具の素材は全部、自然の中にある。人が作ったものではない。洞察、知恵があれば、自然の中で道具を生み出せる。魚とりなども道具が介在せず、直に魚と触れ合ったほうが、成果が上がる。小櫃川のある魚とり名人は同じ場所で釣り、網を投げていて釣果がないところで、一度、潜ると10匹も獲ってくる。

人間、不安だから色んな道具を持つ。自然の中で工夫ができるようになれば、鉋一本で済む。たまに失敗して、おなか減らしてかえって来るけど、それもまたよし。

飯田：子どもと活動している人は、道具との関係をどう考えていますか。参加者1：山村留学の子どもを1年受け入れているが、誕生日にナイフをプレゼントする。道具としての刃物、をプレゼントする。社会的には子供と刃物いろいろ言われているが。最近、古民家を借りたが、

その時、地域の長に鉈をもらった。それは長が手作りしたもの。そのことの重みを感じている。

#### 【不便な楽しみ】

飯田：水についてはどうでしょう？

遠藤：下田は水が豊かなところで、50箇所くらい湧水がある。家を作り始めた冬に、水を引くために行った水源にいた岩魚は、すごく神聖なものに見え、捕ることができなかった。春に見に行った時に同じ場所にいたのは、獲ることができた。一冬越えて、自分が山の一員になった感じがした。

不便なことを遊びに転化すること。水がこないことでもそう。そこにある資源をどうするか。雪を溶かしたり。雪で体を洗ったり。トイレも作らなかった。屋外でしていたが、半年くらいで土に戻る。そうしたら下の集落から苦情が来てしまった。

現在はフィンランドのエコレットというトイレを入れている。これは生ごみも入れられる無臭のコンポストトイレ。タンクの下に腐葉土を少し入れる。タンクが4分割されていて、1年に1回90度まわすと4年後には土化している。最近作った下田のtera小屋というNPOでトイレを売ろうかと思う。

#### 【物語の底にあること】

遠藤：世界の木が切られた理由は鉄を作るための燃料にするため。イギリスの産業革命を支えたのも大量の燃料としての木材だし、ヨーロッパ、中東も1度、切ってしまった森。再生しなかった森もある。中国・朝鮮においても切りっぱなしで、植林という観念がない。日本は放っておいても勝手に木が再生する特殊な土地。そこで木材を求めた人が、朝鮮方面から日本に渡ってきた。出雲で製鉄が始まったのは、鉄があったことと、広大な森があったから。今でも横田町でたたら製鉄をしている。出雲の神話でスサノオノミコトが退治するものはヤマタノオロチだが、単純に蛇退治の話ではない。8人の「鉄山師」がいた。それは鉈山と木材を持っている人たち。農業が盛んになってきた

ところに、上流の鉈山から鉈毒が流れ込み農地を荒らしたので、農民がそれを退治に行き、鉄を持ち帰るという話である。

それぞれ個性がある土地があるのだから、生まれてくる物語も異なる。日本海沿岸各地に鉄に関する遺跡が出ている。海の道と山の道(=修験)の2種類があった。修験とは実は鉈山師のことである。修験が盛んなところでは必ず、鉈山がある。たとえば羽黒山とか、熊野とかの鉄や水銀。その資源で財をなした。信仰だけではあれだけの権力をもてない。そういうところで里の民にはわからない、山のネットワークが存在していたはず。

飯田：日本の自然は人の手が入っていないところはないんでしょうか？Nacs-Jの横山さん、どうでしょう？

横山：手が入っていないのは、ものすごく特殊な場所しかない。「やま」というのは遠くに見える森。「峰」は岩山のこと。神様のいるところ。それぞれ呼び方が違った。普通の里の人と違う形で生きていた裏社会ともいえる山の人たちのことは興味深い。

遠藤：農業を中心産業とした時に、表から消えた。江戸時代に戸籍を作ったが、人別帳にも乗らない人たちで、里から見えない動きをする人たちだった。

横山：カントリーコードは何を指しているのか。

遠藤：人が暮らすだけで、自然破壊になりうる。僕の基準は、隣の森に住んでいるフクロウがいなくなったら、何かが壊れた、ということだと思っている。フクロウに何か影響を及ぼすことがあったなら、いさぎよく山を降りようと思っている。

山は一見豊かだが、ものすごくもろい。それをそこに暮らしている人たちは意識している。都会から来て1~2日で帰っていく人は関係ないが。山の人は自然のことを考えながら、山菜や魚などを捕る。先人が残してくれたもの、そのまま子供たちへ受け継がなくてはならない。それを信仰という形に高めてきた。

昔の山師がいうには、仕事としていても木を切ることは罪深いことだ。ただ、山を生かすために木を切ることは必要。それが山

師の「分際」だとその人は言った。

人間が手を加えなくても山は300~400年周期で壊れ、再生する。それを人間が手を加えることで50年周期にする。が、林業は1代の仕事ではない。2、3代の仕事である。そこで、わざと山の神の木を作る。不伐の木があった方が再生しやすい。違う木、色んな木を混ぜることで再生しやすくなる。また、不伐の木を後の代が緊急時に換金できるようにもなっている。

木を切っている途中に、木から血が出るとか、鋸が動かなくなるとか、そういう怪談がたくさんあった。恐怖感を持たせることも自然を守る手段の一つである。

カントリーコード=言い伝え、おとぎ話と言えるのではないか。

#### 【質問タイム】

参加者2：家庭の水使用ではトイレに使う水量が多い。自分の生活の中で有機物の循環を作り出していきたいくて、コンポストトイレを試作している。水分と固形物を分離するというのがポイントだというのが、どうしているか。

遠藤：エコレットは、両方一緒のタンクに入れられる。ファンが回っている=蒸発させる。地下浸透=ろ過。で水分と固形物の分離はタンク内でしている。水洗ほどの水は使えないが、ウォッシュレットも使える。

飯田：自然と同じ、雨が降って、風が吹いて土化していく。チキンの骨はそのまま出てきた。フィンランドは植物性の樹脂性の袋をつかっているの、生ごみ袋ごと捨てられる。

遠藤：現在使っているのは別荘4人家族用で18万円くらい。ただ、運賃がかかるし、日本にも優れた職人がいるので、日本版を作りたいと思っている。

参加者3：遠藤さんの自然観と土地の人の自然観について

遠藤：地元で学ぶ、ということが大事。そこに生えるものを、うまく生かしていくこと。自然を借りて、住まわしてもらっているのだから、

自然の形を尊重する。自分のイメージだけで自然をいじると、変な影響を及ぼすことになる。木1本を切ることにしても、影響を考えながら切っていく姿勢を学びたいと思う。

お金を生み出すことに重きを置いている人も、たくさんいるけれど、そういう人と意見を言い合ったりすることはある。

参加者4：人が暮らし環境へ影響を与えることに、罪の意識を感じる。自分の生活の中でもジレンマを感じている。子供たちに伝えていくべきことに、悩んでいる。

飯田：信仰心、というか「ありがたさ」を感じていくことではないか。水が使えてありがたい、とか、道祖神とか、沖縄では火の神とか。どうしても使わなければ生きられないのだから、責める気持ちではなく感謝の気持ちを持つようにすることでは？

参加者4：母や祖母に「悪いことをすると、見られてるぞ」と言われていた。食べ物が残っていると、食べなきゃ！と思う。シール入りのチョコで、チョコを捨てるのが問題になったことがあった。お金で物が手に入る、と思うと物を大切にしなくなっていくのではないか。目に見えない何かに見られている、悪いことをすると戻ってくる、という恐怖感は大事。

遠藤：生活実感が足りなくなっている。昔は生活の中にたくさん、そういうものがあつた。火の神、水神、囲炉裏越しに話すと、火の上をコトバが通るので、うそはつけないという決まり事、自在鍵の魚の意味、つける位置の意味。などなど。今は子供に家の仕事をさせない、それがおかしくさせている。

里山は手を入れるから守られてきたが、それがなくなっている。そのために、ウサギが減少している。逆に山のピークは人が入っちゃいけない場所。修験の場所もピークを拝む場所にある。それぞれの場所にあったやり方で、行っていくことが必要。

参加者1：自分の5歳の子どもは天狗と竜を信じている。悪いことをすると天狗があそこの山から来るぞ、と。山村留学の子供には罪悪感を持たせないように接している。人間も自然の一部、という考えを持

てるようにしている。ローインパクトキャンプというのをしている。子供たちと自然に影響を及ぼさないように、キャンプをすること。自分たちも自然と同じにできるという意識を持たせることが必要。

参加者5：今の60代でも炭焼きができない。子供にはやらせてみる、ということ。農作物を作ること、感謝の気持ちが芽生える。

遠藤：失われていくものを記録すること。フォックスファイヤーというアメリカで荒れた学校で、お年寄りに昔のことを聞き取りさせた取り組みがある。今まで物を言わなかったお年寄りが元気になるし、子供も良くなった。

日本も自文化を否定する時代が来て、親がつかなくべきことを繋げなかった。天狗の話もそれに含まれている。それは家庭の機能を回復することでカバーできる。それだったら自分でできるでしょう。

#### 【箸づくり】

竹を割り、削って箸を作る。道具は鉋のみ。鉋は小指で持つ。他の指は添えるだけ。細かいものを削るときは鉋は動かさない。

竹は頭から割る。木は下から割る。まわしながら切る。

箸はこぶしの二握り半の長さにするとうちょうど良い。

箸は神聖なものだった。絶縁体の役割を果たした。食べるというのは魔物を体に入れる行為なので、悪いものが着かないように絶縁体として、箸を使う。それも竹、黒文字、柳など殺菌力の強いものを使う。

#### 【感想】

・普段使っている道具にありがたみも感じていないし、形も観察していないことに、気がついた。

・鉋でこんなに細かい作業ができるとは思わなかった。

・鉋、欲しいかも・・・

・自分で手の延長上のものを使って、作れる範囲のもので生活していくのが、自然にそった暮らし方なのかも。

・今は使用範囲の限られる道具が多い。応用力の高い道具は知恵のか

たまり。

#### 【まとめ】

飯田：遠藤さんの取材スタイルと同じだが、お年寄りから話を聞いて、同じ事をやってみる。

遠藤：取材をして、よく観察して、帰ってから再現する。が、大事なポイントははずしていることが多い。それを聞きに行くと、職人は喜ぶ。

過去のものは「古いこと」ではなく、「基本のこと」が含まれている。基本を踏まえた職人技で新しいものを作り出せばよい。



(レポート：田中亜樹 ぐんま環境教育ネットワーク)